

地域住民の想起から見た大切な場所の特質 ー長野県宮田村を対象としてー

5220D035-3 服部直樹*

本研究は、個人が想起する大切な場所に着目して、自らの暮らす地域内のどのような場所をどのように想起するかについて、その場所を大切だと思う理由の多様性を宮田村を対象としたアンケート調査によって把握した。さらに大切だと思う事の意味について記述を分類し、解釈した。結果として、直接的にその場所を大切だと認識して読み取れる記述から、その場所に対する説明あるいは経験のような大切な理由に結び付く間接的な記述まで、場所ごとに大切だと思う理由が多様に存在していることが明らかとなった。また、大切だと思う事の意味に即して記述を解釈すると、14のカテゴリーに分類することができ、「自身」、「つながり」、「外界」、「将来」の4つに分けられた。これら分析結果を通して、宮田村の大切な場所には無意識的あるいは意識的に感じられる「つながり」の双方があることを明らかにした。

Key Words : 想起, エントロピー, 宮田村, 大切な場所, つながり

1. 序論

1.1 本研究の背景

住民が地域に対して抱くイメージを把握することは地域の景観計画やまちづくり活動を考えていく際に重要な手掛かりとされている。例えば学術的な観点からは K.Lynch¹⁾によるパブリックイメージが相当し、山口²⁾は景観の計画・運営には「当事者性」が考慮されるべきであると指摘している。今後、景観計画やまちづくり活動を行うことを考慮すれば、人々が想起する場所とは、本質をたどると個人の経験や想いが集積した「大切な場所」が考えられ、「大切な場所」に語られた記述からその特質を明らかにすることには十分な意義があると考えられる。

その際、大切な場所に対して一人ひとりが想起する場所や場所の中でも何について言及しているか、その理由は多様であることにも注目すべきである。

また、建部³⁾は、まちづくりを行う上での一つの切り口として子どもが形成した心象風景に着目しており、将来にわたって長く残る続ける場所の計画を考えるためには、今まさに子どもから大人への転換期にある主体に着目する必要がある、と論じている。このことから子どもの視点から場所に対する認識の傾向を捉えることも重要であると考えられる。

1.2 本研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究では子どもをふくめた地域住民が「大切な場所」として自らが暮らす地域内のどのような場所をどのように認識しているかについて把握することを目的とする。

そのため、2020年に実施した「大切な場所に関するアンケート」のデータを用いて、地域住民がその場所を大切だと思う理由についてその多様性を把握する。そして、記述された内容を質的に分析し、ある場所が大切だと想起されたことの意味を解釈する。

以上の二点を通じて、大切な場所の特質を明らかにすることを目的とする。本研究を通して、一人ひとりの大切な場所が地域全体にとっての大切な場所であることを示唆する他、今後のまちづくりを考えていく上で大切な場所がもたらす意義について重要な視座を与えるものと考えられる。

1.3 既存研究の整理と本研究の位置づけ

(1) 既存研究の整理

多様性に着目した想起に関する研究として、吉澤⁴⁾は情報分野や統計分野で用いられるエントロピーという概念から、想起エントロピーという手法を構築し、商店街の同一店舗に対する想起の多様性を定量的に把握した。加えて店舗位置による想起傾向の違いを捉えた。

大切な場所に関する研究として、伊藤⁵⁾は、長野県宮田村に居住する村内住民と中学生を対象に「大

* 早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻 景観・デザイン 佐々木葉研究室 修士2年

切な場所に関するアンケート」を実施し、個人の体験記憶に基づいた風景の認識の仕方を質的に明らかにした。

また、木場ら⁶⁾は大岡山・千束地区の住民を対象に、地域住民の大切な場所がどのような場所であるか、その場所を大切だと思う理由を把握するとともに大切な場所の特性を把握することを目的に「大切な場所」に関するアンケートを実施した。アンケートの質的な分析からは大切に思う理由を10に分類し、そこからさらに「場所の特徴を示すもの」、「場所と個人の関係を示すもの」、「他者の存在により生じるもの」の3つの大きな傾向を見出した。量的な分析では回答数の大小によってどのような人がどのように想起したかを把握した。子どもの地域認識に着目した研究として、建部ら³⁾の研究では、子どもから大人への転換期にある、子どもの豊かな感受性を持って感覚的に捉えた生活空間は、大人になってからも原風景として生き続け、将来の街や文化の形成に大きな影響を与えるといっても過言ではない、と示している。

藤井⁷⁾は、宮田中学校の生徒および保護者を対象に好きな場所に関するアンケートを行い、自分たちの住むまちに対するイメージを明らかにした。中学生と保護者双方のアンケート結果より、季節によって変化する自然の眺めを通して地域を認識していることが明らかとなった。

(2) 本研究の位置づけ

吉澤ら⁴⁾の研究より、商店街を対象に想起エントロピーという手法を適用することで、そのイメージを多様性という観点から把握することができた。そこでこの手法を地域全体に適用することで、人々がその場所を大切に思う理由を多様性あるいは共通性の観点から把握し、様々な理由で大切に思われている場所、画一的な理由で大切に思われている場所を把握できると考える。

さらに、大切に思う理由だけでなく、人々がその場所を大切だと思う事の意味について迫る必要があると考え、質的な分析を通じて浮かび上がる大切な場所の特質を把握する。

また、これまでの地域認識分野の研究の多くは子どもと大人のどちらかを対象としているが、本研究では子どもも将来のまちを担っていく重要な主体として考えていることから、大切な場所に対する認識を把握する際には子どもと大人の両者を対象にし、双方の捉え方について共通点や相違点を論じる。

以上を本研究の特徴として、中学生と村内住民を対象に実施した、「宮田村の大切な場所に関するアンケート」を用いて、アンケートの記述から大切に思

う理由を読み取り、生成的なコード化を行うこと、また記述から浮かび上がる、その場所を大切だと思う事の意味について解釈し、大切な場所の特質を明らかにする。

1.4 本研究の流れ

本研究における分析の流れを図-1に示す。本研究では、2020年10月に伊藤⁵⁾が行った長野県宮田村に住む村内住民と中学生を対象とした「大切な場所に関するアンケート」のデータを用いて分析を行う。

分析の進め方として、まず、大切な場所のアンケート結果及びその分析結果を整理する(第3章)。次に地域住民によって多く想起された場所を対象に、想起の多様性を測り、大切な場所の特徴を捉える(第4章)。そして、個人がその場所を大切だと思う理由や大切な場所に関して想起される心情から、その場所の持つ意味を把握する(第5章)。最後に、4章で明らかとなった結果を、5章の結果と合わせて論じ、大切な場所の特徴を把握する(第6章)。

2. 研究対象地および既存アンケートの概要

2.1 長野県宮田村の概要

本研究で対象とする長野県宮田村は、長野県の南部に位置する人口8,907人⁸⁾の村であり、人口減少や農業の担い手不足など社会と空間に大きな変化が生じており、2017年4月に景観計画を施行した。

しかし、新たな大規模道路の計画が進行中であることや道路沿いに看板が建ち並びはじめ、現在も景観が大きく変わろうとしていることから今後の景観まちづくりを考える上で重要な地域であるといえる。

2.2 大切な場所アンケートの概要

本研究の分析データとして用いる「宮田村の大切な場所に関するアンケート」において、大切な場所

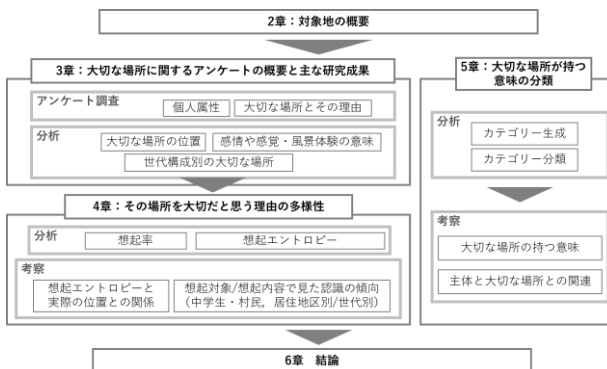
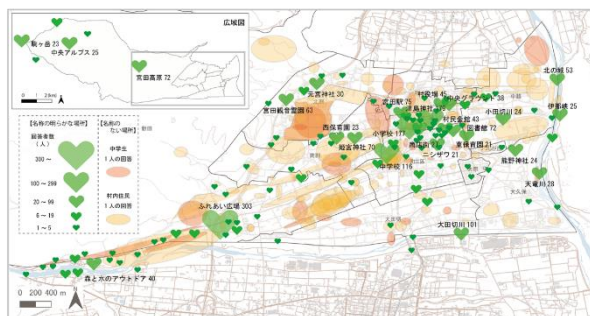


図-1 本研究における分析の流れ

表-1 宮田村の大切な場所に関するアンケートの概要

	中学生アンケート	村民アンケート
調査対象者	宮田中学校全校生徒	宮田村全世帯
調査期間	2020年10月19日～10月23日	2020年10月29日～11月16日
配布数(回収数)	289部(256部)	3021部(681部)
配布方法/回収方法	学校にて配布/回収	タウンプラス/郵送
調査項目	- 大切な場所とその理由(3つ) 「大切な場所」に共通する特徴 2年前の回答と比較する質問(3年生のみ) - 個人属性(学年、居住地区) - 自由記述欄	- 幼少期を過ごした場所、場所の様子や環境 - 大切な場所とその理由(3つ) 「大切な場所」に共通する特徴 - 個人属性(性別、年齢、居住年数または勤労年数、居住地または勤務地の地域、同居人、引越してきた場合の理由、職業) - 自由記述欄

図-2 回答された大切な場所の位置⁹⁾

とその理由について、一人最大3つまで自由記述で回答してもらい形式とし、その他、性別や年齢、居住地区や居住年数などの個人属性を収集した。表-1にアンケートの概要や質問項目を示す。

2.3 先行研究の整理と本研究での着眼点

大切な場所アンケートによって抽出された場所は中学生で754件、村内住民で1813件であった。伊藤による先行研究では、回答された場所を地図に示すことで、多くの回答者によって想起された場所、少数あるいは個人によって想起された場所も存在することを明らかとした(図-2)。この他にも回答者の居住地区や世代構成別で見ることにより、どのような人がその場所を大切に思っているかを把握している。

このようにして、大切な場所とその場所を想起する人との関連性については明らかにされてきたが、大切な場所と大切だと思ふ理由及びその場所で思い浮かべる心情や体験との関連性については、分析の余地があると考え。本研究では、場所の中でも何について言及しているかは人それぞれで異なる、という背景からその場所の何が引き金となって大切とされているかを把握する。その際、人々が想起する個別の要素は多様であるが、吉澤らが構築した想起エントロピーという概念を用いることにより、多様性を含めた想起の傾向を把握する。これらを把握したうえで、大切な場所の持つ意味を質的に分析し、大切な場所の特質を捉える。

3. その場所を大切だと思ふ理由の分類

3.1 分析の目的

本分析ではアンケート回答者が想起した大切な場所に対して何が引き金となって大切だと思われるのかについて、その理由を把握する。一般的にその場所に想起される対象や内容は個々人によって異なるため、多様な想起がされると考えられるが、中には共通に思われている場所も存在すると考えられる。

そこで多様性または共通性という尺度で測り、これらの場所の想起傾向を把握することを試みる。本分析では吉澤らが構築した想起エントロピーという手法を適用することにより、想起の多様性および共通性を数値化し、想起の傾向を把握する。

3.2 記述の分類と想起エントロピーの導出

今回、アンケートで想起された記述は一文で完結するもののみではない。場合によっては文脈で分けられ、図-3のように一つの文章から複数の文章を生成することができる。本分析では想起の傾向を捉えるため、対象と内容に着目し、コード化を行う必要がある。なお、文脈で区切られた記述ごとに対して、対象と内容が一对となるように、コードを付した。

2種類のコードにおいて「対象」については実際の記述を読み取り、「物」、「人」、「空間」、「自然」、「季節」、「行為」の計6分類を生成した。一方、内容については既存研究^[1]を参考に、独自に類型化を行い、12分類を生成することが可能であった。表-2、表-3に想起対象と想起内容のコード一覧を示す。

$$S = -\sum p_i \log_2 p_i \quad (1)$$

表-2 想起対象のコード一覧

物	その場所を構成する要素にまつわる記述(本、遊具など)
空間	場所を指す記述
自然	山や川、生物など自然にまつわる記述
季節	四季を表す記述
行為	祭りや体育祭など具体的な行事の名称
人	友達や家族など人を表す記述(ペットも含む)

表-3 想起内容のコード一覧

経験的認識	現在	現在も継続している経験
	過去	過去のある時点で経験したものの
説明的認識	現在の状況	現在の状態を説明するもの
	過去の状況	過去の状態を説明するもの
印象的認識	知識	対象に対する知識を説明するもの
	好印象	対象に対して好意的な形容詞で表現されるもの
	悪印象	対象に対して非好意的な形容詞で表現されるもの
	可能	「～できる」といった可能を表す表現
意見的認識	その他	どちらか判断できないもの
	必要	「なくてはならない」といったような表現を伴うもの
	要望	「～したい」や「～してほしい」といった事象
	期待	あることを心待ちにしている様子

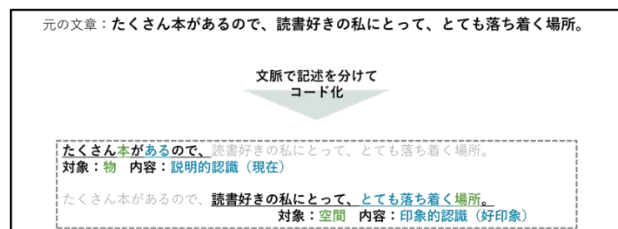


図-3 記述のコード化の方法

また、以後使用する想起エントロピーの値は式(1)のようにして算出し、ここでの p_i とは、着目する項目が想起された割合、すなわち想起率とし、3.3節の分析では、対象と内容を組み合わせた全72項目の総想起数を分母にし、各項目の発生数を分子にして場所ごとに算出した。このようにして求めた想起率 p_i を(1)に代入して算出する。

3.3 想起した対象と内容の多様性

(1) 中学生・村内住民の想起傾向

中学生アンケート、村内住民アンケートのデータを統合したものを図-4に示し、地域住民全体としての想起傾向を把握する。

一般的に、想起された数が多いほど、多様な要素が想起されると考えられるが、図-4より、最も記述数が多い場所はふれあい広場であり、想起エントロピーの値も高いが、全体で見ても記述の数によらず、想起エントロピーの値が高い。つまり宮田村に住む地域住民全体の想起傾向として、それぞれの大切な場所には、大切だと思える理由が多様であることが読み取れる。特に宮田駅では、記述数が多くないにもかかわらず、想起エントロピーの値は高い。この点については後で考察するとして、本項では中学生と大人、双方のデータを統合しているが、背景にも述べたよう、子どもと大人それぞれの視点では違った認識をしていると考え、次項では中学生と大人それぞれの認識の違いを読みとることとする。

(2) 中学生/村内住民それぞれの想起傾向

中学生と大人それぞれの大切な場所に対する記述数と想起エントロピーの関係を表したグラフを図-5、図-6に示す。

まず、両者の結果から、村内住民では図-4同様に、記述数によらず多様な想起をしていることが読み取れるが、中学生は想起エントロピーと記述数との関係に違いが見られる。

図-5に見られるように中学生の想起は大きく2つの傾向に分けることができる。一つは想起エントロピー値が高い場所、すなわち「森と水のアウトドア体験広場」、「中学校」、「図書館」、「ふれあい広場」であり、もう一方は想起エントロピー値が低い場所

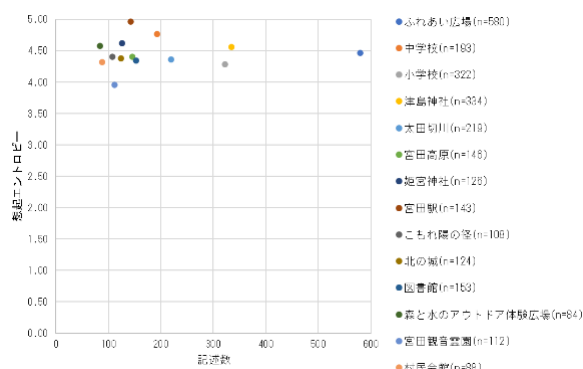


図-4 場所の記述数と想起エントロピーの関係 (中学生、村内住民)

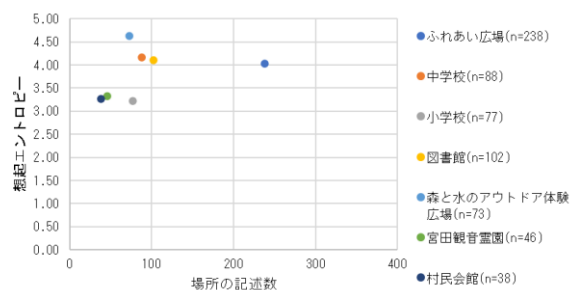


図-5 場所の記述数と想起エントロピーの関係(中学生)

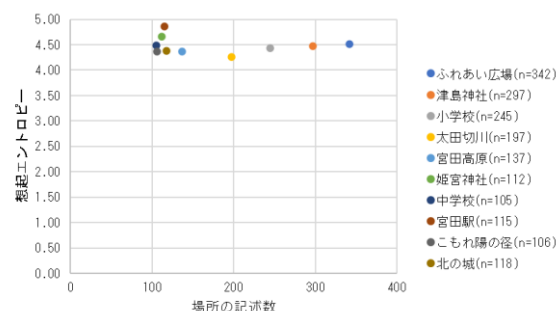


図-6 場所の記述数と想起エントロピーの関係(村内住民)

であり、ここでは「宮田観音霊園」、「村民会館」、「小学校」である。実際の記述を見ると、想起エントロピーが高い場所では、「中学校」を筆頭に現在も頻繁に利用する施設という特徴が見られた。

このことから、現在利用している場所は、記憶が鮮明であり、あらゆる要素に対して発言しているということが考えられる。一方、想起エントロピー値が低い場所では、過去に利用した経験がある場所として見る事が可能であった。

図-6より村民の回答ではどの場所も記述数の大小にかかわらず、想起エントロピーの値は高かったことから村民からはどの場所に対しても多くの対象や内容を想起することがわかる。中学生との想起の仕方を比較するため、両者ともに想起された「小学校」に着目すると中学生が比較的まとまった想起を

する(エントロピー値=3.22)のに対し、村民では多様な想起をしていた(エントロピー値=4.43)と判断できる。この差は中学生が「経験的認識(過去)」や「印象的認識(好印象)」として小学校を認識していたのに対し、村民ではこれらに加え、自身の子どもに対する説明や普段の生活などで蓄積された経験を説明する「説明的認識(現在)(過去)」で多様に認識していたためだと考えられる。

3.4 想起エントロピーと大切な場所の位置関係

本節では、図-4で算出された想起エントロピー値を用いて、多様な想起がどのような場所で発生しているかについて、記述の大小とともに地図上に可視化した。地図への可視化にあたって、想起エントロピー値の大小を色の濃淡、記述の大小を円の大きさで表し、特徴を考察する。

図-7によって、多様な想起が発生している場所と相対的に共通な想起が発生している場所を示すことができた。また、回答された大切な場所の地図を示した図-2と合わせてみることで、記述数の多い村の中心部ではエントロピーの値は高い、つまり多様な想起が発生していることがわかる。また、図-4において宮田駅が突出してエントロピーの値が最も高い。宮田駅周辺の小学校や津島神社のエントロピー値は必ずしも高くないことから、中心地という立地によるものではなく、宮田駅という場所・施設特有の特徴であることが想起の偏りにつながったと解釈することができる。また、図書館と村民会館のように用途が異なっている、同じ建物内に併設されているような場所では、想起の多様性が同程度であることが分かる。

4. 大切な場所が持つ意味の分類

ここではその場所を大切だと思ふ理由やその場所での体験の記述から、大切な場所が持つ意味を解釈し、分類する。

4.1 分析に用いる記述の選定

記述の分類を行うために、「大切な場所を思い浮かべることの意味」というテーマを予め設定し、その分析が可能で、ある程度具体的な記述を抽出した。その結果、中学生アンケートでは全754件に対して561件、村民アンケートでは全1813件に対して1550件を分析対象とした。これらの記述を内容に対してテーマに沿ったカテゴリーを生成したところ、計14のカテゴリーを得ることができた(表-4)。

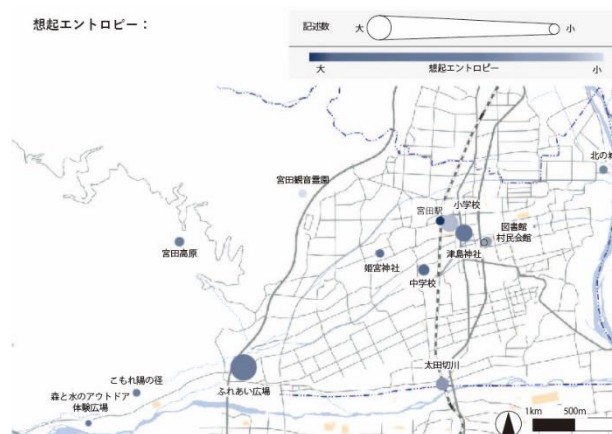


図-7 想起エントロピーと場所の関係

4.2 生成された14のカテゴリーについて

前節で生成された14のカテゴリーを想起の方向という観点から見ることで「自身」、「外界」、「つながり」、「将来」の4つに大別できた(表-4)。

「自身」とは、想起されている対象が自身そのものや、自身がその場所に対して感情を抱いている記述のように内省的な記述が該当する。「外界」とは、想起されている対象が、他者や空間など、外に向いている記述である。「つながり」とは、他者や周りを想起しながら自身について語っている記述であり、「自身」と「外界」双方向のやりとりとして解釈できる。「将来」は、今、現前の物を対象に想起したものから、将来にむけて語っている記述である。

これらの結果をもとに、図-8、図-9に中学生、村内住民それぞれにおけるカテゴリーの割合を示す。

図-8、図-9の比較により中学生、村内住民共に「外界」が最も高い割合を示すことが読み取れる。それぞれの特徴について整理すると、中学生では、村内住民と比較して「自身」について想起する割合が高く、「つながり」を想起する割合が低いことが読み取

表-4 想起の方向の4分類

大分類	小分類
自身	幼少期の思い出を想起させる場所
	自分の人生を振り返る場所
	誇りに感じる場所
	現在や当時の日常を想起させる場所
	複雑な感情を想起させる場所
つながり	自身と外界とのつながりを想起させる場所
外界	他者を想起させる場所
	他者との活動を想起させる場所
	なつかしさを想起させ、今も残り続ける場所
	歴史や伝統を想起させる場所
	今はない、過去のを想起させる場所
	行為や感覚を含めた眺めを想起させる場所
将来	継承の願いを促す場所
	将来を案ずる場所

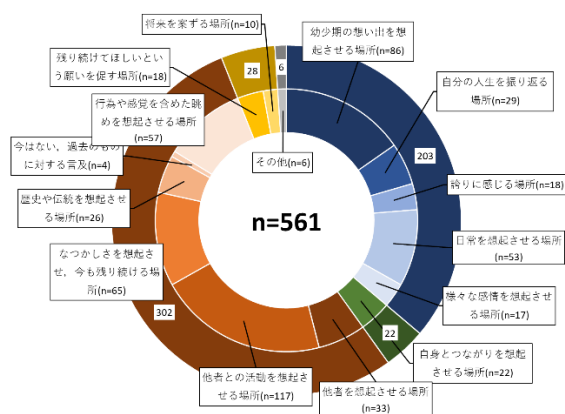


図-8 想起の方向性の14のカテゴリー割合（中学生）

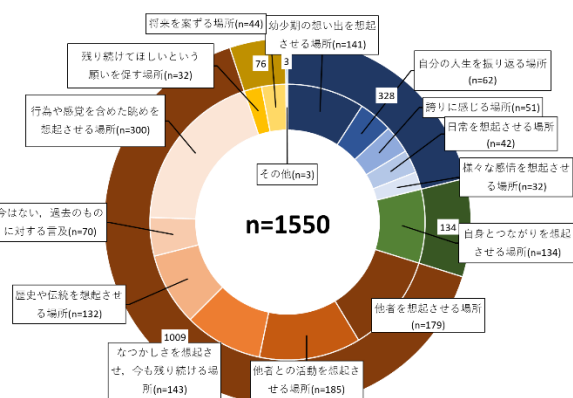


図-9 想起の方向性の14のカテゴリー割合（村内住民）

れる。一方、村内住民では「つながり」と「外界」に対する想起割合が比較的高いことが読み取れる。これらの結果と実際の記述をあわせると、中学生では自身の経験が豊富に語られ、特に幼少期の経験やその時一緒にいた他者との活動が多く見られたことから、大切な場所を通して「自身の体験が感じられる」、あるいは「自身を想起することができる」場所として大切だと思われることが考えられる。一方、村内住民の傾向からは、他者や周囲の環境について言及したものが多くことから、「誰かとともに過ごした経験」や「その場所で感じることでできる季節の変化や宮田村の自然の魅力」について想起することができる場所として、認識されており、またそこには、大切な場所を媒介して得られる「自身とのつながり」が認識できる場所として大切に思われているということが考えられる。

4.3 主体と大切な場所の関係性

前節では、カテゴリーの構成割合から全体としての傾向を読み取った。

中学生、村内住民では同一カテゴリーに分類されたとしてもその内容は完全に一致するとは限らないのではないかという問題意識から、まず一つ一つの

カテゴリーに含まれる記述に着目し、中学生と村内住民でその場所を大切だと思う意味にはどのような共通点や相違点があるかを対照させた。以下に特徴が見られたものについて述べる。

(1) 幼少期の思い出を想起させる場所

このカテゴリーに分類された記述の特徴として、中学生、村内住民ともに「遊んだ」という記述が最も多く見られ、そこには家族や友人などの他者との活動が多く見られた。より、記述の詳細に着目すると中学生では「遊具」や「学校で遊んだ」という表現が多く見られたが、村内住民では「魚とり」や「田んぼリンクでスケート」のように自然での遊びが多いことが分かり、記述から昔の子どもたちはより、自然と密接にかかわっていたことが伺える。

(2) つながりを想起させる場所

つながりを想起させる場所において、中学生と村内住民では異なる傾向が見られた。まず、中学生においては、「自宅」を多く想起する傾向にあり、自身の住む家を通じて、自分の存在を確認している記述やこの場所に属している、といったような帰属意識が芽生えている場所として解釈することができた。

一方、村内住民においては「自宅」に限らず、自然や村の人とのつながりを感じている記述が見られた。また、直接的につながりを感じているのではなく、何か整備されているものを見て私と同じものを他の人が使っているというような間接的なつながりをも認識している、と解釈することができた。

(3) 行為や感覚を含めた眺めを想起させる場所

このカテゴリーに分類された記述の特徴として、中学生ではその場所を眺めた情景を想起することにより「落ち着く」や「安心する」といった感情が引き出されることが明らかとなった。また、視覚的な表現が豊富に使用されており、季節の訪れや時の移ろいを感じ取っている記述も多く見られた。村内住民でも知覚表現が豊かであり、季節の訪れを感じるという点において中学生と同様の想起傾向を確認することができた。一方、場所の中に自分を投錨して客観的に想起する記述のように風景と自身を一体化させて認識している記述が村内住民特有の傾向として見る事が可能であった。

(4) 継承の願いを想起させる場所

このカテゴリーにおいて中学生では、その場所が必要であることを訴えている記述が確認された。この「必要性」とは自身にとって必要というよりも「みんなにとって」のような他者を含めた社会的な必要性として残してほしいといった記述であるのが特徴

である。村内住民でも同様の傾向が見られ、将来にわたって残り続けてほしいものの中には、「山」や「商店」などの形あるものに対しての継承の願いの他、「お祭り」や「自校給食」などの形を有さない伝統や文化についての記述も見られた。

4.4 大切な場所の記述と場所の特性との関連性

(1) 分析の目的と大切な場所の分類

前節では、記述の持つ意味を読み取ることを目的として、1件1件の記述を読み取ることでカテゴリーを生成し、分類を行った。しかし、アンケート回答者は記述と場所を関連させて想起していることから場所との関連性についても言及しなければならない。その際、場所の特徴ごとに類似するものをグループ化し、「その他」を含む計8項目に集約した(表-5)。以下では、これらの8グループごとに14のカテゴリーの割合を見ていくこととし、「大切な場所を思い浮かべることの意味」に即した14のカテゴリーそれぞれがどのような場所で発生しているかを把握する(図-10、図-11)。

図-10、図-11のグラフを比較すると、中学生ではほとんどの場所において「他者との活動」を想起させる場所が多く抽出されていることが分かる。一方、村内住民では、平均的に多くのカテゴリーによって構成されている。特に「自身とつながりを想起させる場所」や「行為や感覚を含めた眺めを想起させる場所」の項目が多く抽出されている。

中学生が想起した場所ごとに特徴的なものについて見ていくと、「屋内利用施設」や「自然体験施設」、「自宅」では、多くのカテゴリーによって構成されている。それに対して、「自然」や「公共施設」、「地区」では、少ない種類のカテゴリーで構成されている。これは、中学生の想起エントロピーの結果からも言えるように、日常的に利用している場所や豊富な経験がある場所のように真っ先に想起する対象ではその想起のされ方も様々であるのに対して、利用頻度の低い場所では、想起数が低いこともあり多様性が見られない。

一方、村内住民が想起した場所については、「自身の人生を振り返る場所」が中学生同様、「自宅」と「地

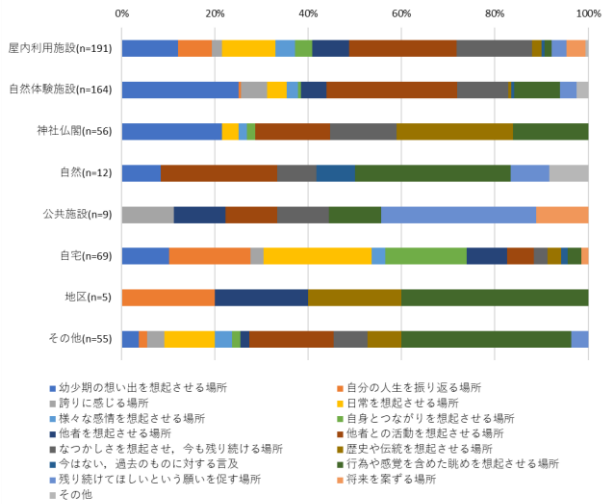


図-10 場所ごとにみた想起のカテゴリーの構成比 (中学生)

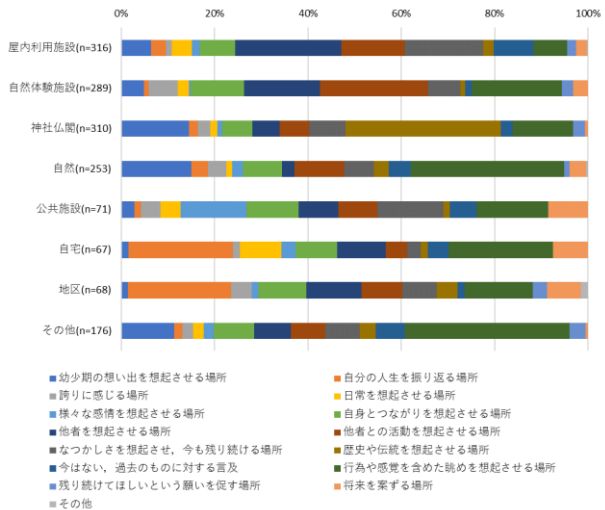


図-11 場所ごとにみた想起のカテゴリーの構成比 (村内住民)

区」において発生している。「様々な感情を想起させる場所」は「公共施設」において、発現されており、中でも、宮田駅に関する記述が多い。その記述の中身は、他者との別れを惜しむ内容や宮田駅の寂しい様子を描写した内容が挙げられていた。また、どの場所も「自身とつながりを想起させる場所」が一定数存在している。このことから自身と大切な場所との間に「つながり」を実感できる多様な場所がある事が明らかとなり、中学生では見られなかった傾向である。

表-5 大切な場所の分類一覧

対象	分類例
屋内利用施設	スーパー、図書館、公民館、村役場、学校
自然体験施設	公園、広場、ゴルフ場、グラウンド
神社仏閣	真慶寺、姫宮神社、津島神社
自然	山、太田切川、宮田高原
公共施設	橋、ダム、道路、駅
自宅	自宅
地区	地区名そのもの
その他	上記に当てはまらないもの

5. 結論

5.1 本研究で得られた成果

本研究で得られた成果をまとめる。

まず、地域住民が大切な場所をどのように認識しているかについて把握するため、個人がその場所を大切だと思う理由に着目し、「対象」と「内容」の組み合わせに対してエントロピーという手法を用いることにより、想起の多様性を分析した。

結果として、同種の想いとして認識されている場所は、少なく、全体として多くの場所がその想起数によらず、多様な想起がされていた。このことから大切だと思う要素は集約しているのではなく、多様に存在していることが明らかとなった（第3章）。

一方、その場所を大切だと思う事の意味を解釈するために、個人の心情が具体的に記された記述に着目したところ、14のカテゴリーを生成することができ、そこから「自身」、「外界」、「つながり」、「将来」という4つの重要な想起の意味を考える際の視点を導くことができた。具体的には自身を顧みるような内向きの方向があるとともに、その場所が存在することによる感謝やエピソード、伝統などの外向きの方向があることが明らかとなった。また、大切な場所を介して、自身の存在が認識できることや、自分とつながっているというまさに「つながり」が実感できる場所、つまり自身と他者の双方向での結びつきの実感が場所という空間から得られていると考えられる。さらに「将来」のカテゴリーから、時間軸が大切な場所の認識には関わっていると考えられる（第4章）。

以上をまとめると、宮田村における大切な場所には、大切だと思う要素が多様に存在している。このことから単にその場所があることが重要ということではなく、「対象」一つとってもそこには個人の「経験」や「将来に対する意見」など、様々な要素と絡み合っ「大切だ」という理由に繋がったものと考えられる。

更にこれと14のカテゴリー結果を合わせて論じると、大切な場所には自身と「他者」や「空間」、「時間的奥行き」との間に生まれる「つながり」を実感できる場所がある、といえる。このようにして「自身」と「他者」との間に見出された「つながり」とは個人によって異なるが、この個人的な「つながり」が多様に分布していることが本研究によって発見された。それはつまり、社会的に「大切だ」と思えるような余地がたくさん残されていると解釈でき、これが宮田村における大切な場所の「特質」とであるといえる。

5.2 課題と展望

本研究は、アンケートに記述された文章を定性的コーディングによって大切だと思う事の意味や理由を明らかにした。今後、これらの結果が十分に活用されるためにはワークショップ等により、共有できる機会が必要であると考えられる。また「私」にとっての大切な場所を他者の語りから把握することによって多角的な視点から見る事が可能となり、更に「大切にしていきたい」という意識の醸成に繋がることが期待されるからである。

そして、地域の景観計画やまちづくり活動を行う際には、本研究を通じて浮かび上がった大切な場所の特質である「つながり」を軸に計画を考えていく必要があり、自身と他者や空間との「あいだ」を意識した場所の保全や運営が必要であると考えられる。

補注

- [1] 使用した既存研究は岐阜県恵那市を対象に地域認識を捉えた研究であり、西村は地域認識を「経験的認識」、「説明的認識」、「印象的認識」、「課題的認識」の4つに大別できるとした。本研究ではこれを参考に、想起内容を分類した。

<参考文献>

- 1) K.Lynch 著、丹下健三・富田玲子訳：都市のイメージ、岩波書店、1968
- 2) 山口敬太：風景の持続性に関する基礎的考察-景観の計画・運営における方法と課題-、土木計画学研究
- 3) 建部謙治・松本直治・花井雅充：生活空間における心象風景と地区特性との関連性-子どもの心象風景に関する研究 その1-、日本建築学会計画系論文集、No.565、pp.217-223、2003
- 4) 吉澤広大・佐々木葉・高野裕作：近隣商店街を構成する焦点に対する住民の想起傾向に関する研究-尾山台商栄会商店街を対象にして-、景観・デザイン研究講演集、No.11、2015
- 5) 伊藤夏歩・服部直樹・佐々木葉：長野県宮田村における想起された大切な場所の特質、景観デザイン研究講演集、No.17、2021
- 6) 木場佳音・杉田早苗・土肥真人：個人の大切な場所が織りなすまちの構造の研究-大岡山・千束地区を対象として-、都市計画論文集、Vol.56、No.3、2021
- 7) 藤井未来：宮田村立宮田中学校の生徒の地域認識に関する研究、早稲田大学卒業論文、2018
- 8) 宮田村公式サイト_人口・世帯数_宮田村の人口及び世帯数の推移(令和3年：毎月更新)_令和4年1月1日時点人口詳細.pdf(最終閲覧日：令和4年1月25日)
- 9) 西村奏絵：地域認識の抽出方法と得られる認識の特性に関する基礎的研究、早稲田大学修士論文、2015

<外部発表記録>

伊藤夏歩・服部直樹・佐々木葉：長野県宮田村における想起された大切な場所の特質、第17回景観・デザイン研究発表会、2021.12.12、発表